

群・表現・生産性

道田 蒼人 (Soto Michida)

京都大学

命題的内容の担い手は、言語表現や人間の思考に限られるのだろうか。生物も人間と同様に表象を形成しうるかもしれないし、逆に両者のあいだには決定的な断絶が存在するのかもしれない。意味論的自然主義者は概して、この断絶を最小限に留め、表象概念の適用範囲を拡張してきた。ところが近年、この拡張に対して強力な批判が提起されるようになってきた (Burge 2010)。この種の批判は、表象の下限を過度に低く設定することは、真に表象と呼びうるものとそうでない基礎的な感覚知覚との区別を不当に消し去ってしまうという懸念を表明している。一部の自然主義者はこのようなボーダーラインの設定要求を退け、リベラルな表象観を擁護している (Artiga 2016)。

以上の動向を踏まえると、ミリカンの立場は特筆に値する。というのも、彼女は徹底的なリベラリストであるからだ。人間の駆使する表象と動物の表象の間には、自然主義者であっても認めざるを得ない明確な質的差異があるにもかかわらず、ミリカンはそのことを認めない。この差異を生み出しているのは、「生産性 (productivity)」の有無である。一般に動物のシグナリング行動のレパートリーは制限されているのに対して、言語は高度な柔軟性を示す。すなわち、われわれはこれまで見聞きしたことの無い文を生成し、それによって豊かな命題的内容を伝達することができる。この人間言語に著しい特徴を生産性といい、一般に、その基盤は言語の「合成性 (compositionality)」に求められる。ところがミリカンは合成的な構造を特権視しない。むしろ彼女は、部分の意味の関数として全体の意味を導くため統語構造を欠いている動物シグナル、例えばミツバチのダンスやサル警戒コールから、果ては足跡のような自然界にありふれたインデックスでさえも、生産的な記号体系をなしていると主張する。曰く、記号体系に生産性をもたらすのは合成性ではなく「建築的な構造化 (architectural structuring)」というより一般的・抽象的な原理である (Millikan 2004a, p. 48; 2013, pp. 85–86)。

ミリカンの立場には三つの問題が指摘できる。第一に、そもそも合成的な構造を欠く記号の体系がいかなる意味で生産的でありうるのか。議論の前提として、まずミリカンはどんな現象を生産性と呼んでいるのかを正確に把握する必要がある。第二に、ミリカンはあるときには生産性の基盤を記号の「分節性 (articulateness)」に求め (1993, p.132)、またあるときには数学的な「同型性 (isomorphism)」に求める (2004a, p.84; 2004b, p.19) というアンビバレントな態度をとっている。そのため彼女が想定している「建築的な構造化」の正体は明らかではなく、加えてこの論証の曖昧さゆえにミリカンの解釈者の間でも彼女の生産性概念は受け入れられていない (Martínez 2013; Shea 2013)。第三に、ミリカンは合成的構造を備えた記号体系とそうでない体系の差異を過小評価しており、その結果きわめて薄い生産性概念を採用しているだけではないか、という疑念が残る。この疑念は Burge (2010) の懸念と軌を一にする。拡張された生産性

概念を認めるミリカンのプロジェクトは、一体どんな新しい展望を開くのだろうか。

第一の問題はテキスト的証拠の精査によって対処することが可能だが、より深刻なのは残りの二つである。本報告ではこれらの問題に対して、群論的な観点から解決策を与える。具体的には、ミリカンのいう同型性を「群準同型写像 (group homomorphism)」として再定式化し、そこから生産性を保証する意味の割り当て関数が構成できることを示す。この結果により、彼女が明示的な形で提供し損ねていた論証を再構成することができ、第二の問題を解消できる。最後の問題については、ミリカンの理論は以下のようなビジョンを提示しているという仮説を立てることによって応答できる。すなわち記号体系の複雑性の程度を測る際に重要なのは、その内部にどのような演算が定義されているかという観点ではなく、どのような構造をもつ群がその体系に対してどのように作用しているかという観点である。この仮説は、ミリカンの内部で生産性の説明と「目的論的機能主義 (teleofunctionalism)」がいかに整合しているのかに関して示唆を与えるという点でも、興味深いものとなる。

参考文献

- Artiga, M. (2016). Liberal representationalism: A deflationist defense. *Dialectica*, 70 (3), 407–430.
- Burge, T. (2010). *Origins of objectivity*. Oxford University Press.
- Martínez, M. (2013). Teleosemantics and productivity. *Philosophical Psychology*, 26 (1), 47–68.
- Millikan, R. G. (2004a). *Varieties of meaning: The 2002 Jean Nicod lectures*. MIT Press.
- Millikan, R. G. (2004b). On reading signs: Some differences between us and the others. In D. K. Oller & U. Griebel (Eds.), *Evolution of communication systems: A comparative approach* (pp. 295–309). MIT Press.
- Millikan, R. G. (2013). Reply to Shea. In D. Ryder, J. Kingsbury, & K. Williford (Eds.), *Millikan and her critics* (pp. 81–86). Wiley-Blackwell.
- Shea, N. (2013). Millikan's isomorphism requirement. In D. Ryder, J. Kingsbury, & K. Williford (Eds.), *Millikan and her critics* (pp. 63–86). Wiley-Blackwell.